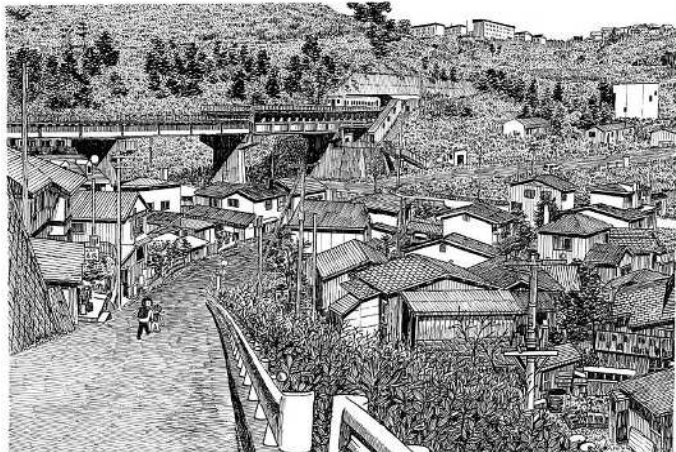


11. 室蘭の坂

港を囲むように高台で形成されている室蘭市には至る所に坂が存在し、生活と密接に関係しています。そして、室蘭という名前も坂が語源で、史実や地域で起こった出来事などが「坂」の名前の由来になっていて、普段、何気なく通っている坂に室蘭の史実を垣間見ることが出来ます。また、室蘭を舞台にした小説や随筆などの文学作品にも「坂」が登場し、情緒豊かな景観ゆえに近年はテレビや映画の撮影などにも使われ、訪れる人も増えています。

室蘭の地名の由来も「坂」 ムロラン地名発祥の坂と室蘭村 (崎守町、仙海寺前の坂、標識有り)

室蘭の語源は、アイヌ語の「モ・ルエラニ(小さな・下り路)」から転化したものです。モロランと呼ばれていた崎守地区は、幌別から山越えをして虻田方面に通じる要衝の地として幕府直轄の会所や通行屋が設けられ、荷物を宿場から宿場まで送り届ける駅遞や旅人宿、商店などが建ち並び、明治維新当時、室蘭村はこの地方最大の賑わいを見せるようになり、その地が「モロラン村」と呼ばれていたため、現在の「室蘭」となりました。



しかし、明治5年(1872)、現在の緑町(トキカラモイ)に港が開かれ、新室蘭と命名されると、開拓の拠点には白鳥湾対岸の旧札幌通(現在の中央町の中央通線とヤマコしらかわ米店前~道道祝津西小路中央線との交差点付近)周辺に移り、崎守地区は「元室蘭(後の本室蘭)」と呼ばれました。

・「モロラン村」と呼ばれていた創成期に、陸路の難所についた名は 七十二坂とも七段坂とも (上り下りを繰り返す国道37号黄金から知利別までの陸路)

モロラン村が交通の要路として発展した頃、有珠から室蘭、室蘭から幌別までは一日がかりでした。そこから国鉄線路に沿うように丘を上がって陣屋に下り、浄水場付近を上げて山を登ります。そして八丁平に出て知利別に下るこの上り下りの激しい陸路の難所を当時の人々は、七十二坂または七段坂と呼びならわしました。

「石垣」は当時の繁栄の証し 問屋の坂(産物の坂) (海岸町、日本一の坂から200m祝津寄り、標識有り)

明治25年(1892)、輪西~岩見沢間に北海道炭礦鉄道会社(以下北炭)により鉄道が敷かれると、室蘭は石炭積出港として大きく発展しました。北炭の石炭荷役を一手に請け負ったのが佐々木商店(ヤママルイチ)の佐々木市造。その繁栄ぶりは城壁にも似た石垣(一部改修)が物語っています。

明治39年(1906)、有珠の石を運び、京都から石垣職人を連れてきて作らせたもので、一度組上げてから縁起が悪いと全部崩して組み直したそうです。今はありませんが、石垣の上には、敷地500坪にくぎを一本も使わない宮造りの平屋建ての豪邸と厩(うまや)がありました。明治31年(1898)に海産物卸問屋の室蘭産物会社(道道室蘭港線沿い、問屋の坂手前の3件目辺り)が創業されると、その石垣のある坂は人であふれ、「問屋の坂」または「産物の坂」と呼ばれるようになりました。

石炭産業最盛期のころの港は、まだ明けそめぬ星空の帳を破るように、石炭列車が夕張から到着し、入江埠頭に数百輛の「セキ」印の貨車が止まっていました。その先には貯炭場の山と、うなるトランスポーターがあり、岸壁では荷揚げ人夫がパイスケ(竹製の運搬具)を肩に調子を取りながら歩み板を渡って舳(はしけ)を往復していました。

文学作品に登場する坂 バクチェンホ 朴重鎬『会期』より

「坂は約百メートルの距離だ。けっこうな勾配なので、爪先に重心を取って歩かないと、足払いをかけられたときのように、背中から叩きつけられることがある。坂道の片側は石垣になっていて、風雪に耐えた黒々とした荒削りの四角い石の層が坂を降り切ったところでは、十メートルを越す高さになっている。」

西小路の坂 (西小路町にある勾配率23%の急坂、昔は「丹波の沢」とも呼ばれていた)

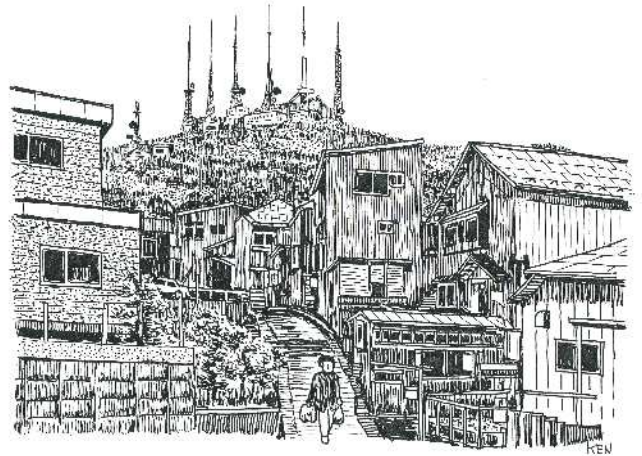
測量山に通じる坂。芥川賞作家八木義徳の小説『海明け』の舞台となっています。この付近で、八木自身が3歳まで乳母に育てられました。(文学碑...46ページ参照)

文学作品に登場する坂

八木義徳『海明け』より

「午前五時半、江川史郎は家を出た。北国の冬の夜明けは遅い。空はまだ黒い夜の色だが、大地にはほの白い雪明りがある。昨夜はまたかなりの量の雪がふったから、けさの雪は新雪だ。」

史郎は中学の制服に黒いマント、それにゴムの長靴という恰好で、西小路の坂をゆっくり下って行った。この坂道にはまだひとりも人影がない。両側に軒を並べた家々は、どこもみな戸をとざして、ひっそりと寝静まっている。」



「この道南の室蘭市でも西小路という町は一風変わった町だ。」

幅三間ほどの坂道をはさんで、東側はすこし小高い丘陵地帯になり、そこには警察署長や税関署長の官舎、その上の方には汽船会社やドック会社の高級社員の社宅、さらにその上の方には東京や札幌に本店をもつ大手銀行の課長クラスなどの住む社宅が、それぞれ高い坂塀で仕切られて特殊な一角をかたちづけている。

その反対の西側はゆるい傾斜地帯になって、そこにはほとんど港湾関係の労働者ばかりの住む貧しい長屋が、塀も仕切りもない裸のまま、軒をつらねている。

いってみれば、この西小路という町は一本の坂道をはさんで、その東側には陽の当たるひとたちが住み、その西側には陽の当たらぬ者たちがいやに鮮明な対照として住んでいる、ということになる。」

意外な事実から名付けられた

日本一の坂 (海岸町、旧室蘭駅舎向かいの室蘭釣具店横の小路、標識有り)

旧室蘭駅舎向かいにある釣具店横の小路の坂です。初めて耳にする時、何が「日本一」なのか気になる名前ですが、意外な事実から名付けられました。

名前から推し量ると、さぞかし大きな坂と思われそうですが、名前の由来は、「福井庵日本一」というそば屋がこの辺りで開店していたことに始まります。

明治36年(1901)、このそば屋の主人は、小樽で殺人を犯して室蘭に流れてきた偽名を名乗るお尋ね者でした。ある日、夫婦げんかが高じて、妻が“人殺し”と口走ってしまい、折も折、別の事件で刑事がこのそば屋を訪れるようになっていた矢先のことでした。てっきり小樽での殺人がばれたと早合点した男は、日夜苦悩のあげく、とうとうピストル自殺してしまいました。事件に衝撃を受けた町の人々が、流れ者の末路を教訓として、この坂を日本一と名付けたといわれています。

文学作品に登場する坂 八木義徳『帰郷』より

「十七年ぶりの帰郷だった。私は室蘭駅の改札口を抜け出ると、町の高台にある八幡神社をめざして、まっすぐに歩き出した。それは私の意志というよりは、脚自身が勝手にその方向へ向かって歩き出したというに近かった。何か眼に見えぬものに曳かれて行く。そんな感じだった。駅前から坂を一つ登って泉町の通りへ出る。その通りに面して高く立った石造りの鳥居をくぐり、そこから傾斜のかなり急な八十段ほどの石の階段を一段ずつゆっくり登った。」

急こう配の階段に付いた名は

八幡坂(はちまんざか) (海岸町)

道路(道道室蘭港線)を挟み、旧室蘭駅舎の向かい側にある幅6m・57段の急こう配の階段の名前です。階段を上りきった道路の向かい側には、八幡神社鳥居と神社に至る階段がさらに続きます。駅向かいのこの場所には、もともとは問屋街があり、先の戦争のときに「駅前には爆撃の対象になるから」と建物の強制疎開がありました。立ち退いた問屋の倉庫内にあったジクザクの階段のみが残され、通行に利用されていました。

昭和32年(1957)に旧産業会館(平成26年解体、現在は公園)が建築されたとき、幅1mほどの階段に新設。室蘭駅への往来に利用する通行人などが多いため、昭和36年5月、さらに整備され、この階段を呼びならわした八幡坂が路線名となりました。階段上からは、間近に旧室蘭駅舎の全景と背後に室蘭港が見渡せます。(室蘭八幡宮...56ページ、旧室蘭駅舎...65ページ参照)

遊郭街の面影はなく

幕西の坂(幕西坂) (幕西町)

幕西の語源は、アイヌ語「マクン・ニウシ」で、「後方の・森林(知里真志保の訳による)」の意味です。「ニウシ」には「木・群生している・ところ」の意味もあります。

その昔は名だたる遊郭街で、明治5年(1872)の札幌本道工事に従事した数千人の荒くれ男が、始終この場所に通い、殴り合いの喧嘩が絶えず、幕西坂は“人殺し坂”と異名をとるほどでした。幕西游郭は、同25年(1892)北海道庁の告示により、老名牛(おいなうし:現在の追直)に移転することになったのですが、老名牛住民が「コンブの干し場がなくなるし、風紀上好ましくない」と猛反対して中止になりました。

同28年(1895)に、幕西を遊郭区域に指定し、札幌通沿いに点在していた料亭や貸座敷が集約され「幕西游郭」が誕生しました。最盛期の同42年(1909)、当時の室蘭町内には、幕西游郭を中心に、料理店78件、貸座敷13件がひしめき、結局終戦後の公娼制度廃止まで続きました。

現在の幕西の坂は落ち着いた住宅街に生まれ変わり、その当時の風情はほとんどありません。

難工事の犠牲者を思う

仏坂(ほとけざか) (NHK室蘭放送局前)

明治5年(1872)4月に始まった、室蘭の夜明けを告げる室蘭 - 札幌間の札幌本道開削工事は、わずか1年3カ月のスピード工事によって完成をみました。この工事は度重なるコースの変更や切り下げが行われた難所で、明治40年創業の日本製鋼所の開設に伴う工事と相まって、犠牲となった人夫も多く、この工事場付近に一時仮埋葬されたため、だれ言うとなくこの坂に名付けられたのが「仏坂」でした。当時は両側に木が茂り、昼間でもさびしいところで、夜間の人通りは全くなかったそうです。「行こか幕西、帰るか母恋、ここが思案の仏坂」という歌がありましたが、これは、母恋の社宅に住む日鋼社員が自宅に帰ろうか、遊郭街のある幕西に行こうかと、鬼気せまる仏坂の手前で迷う姿を冷やかしたものです。

明治43年(1908)、工事の犠牲者と日鋼工場建設の犠牲者の慰霊の為、仏坂を見下ろす丘に仏坂招魂碑(39ページ参照)が建てられました。昭和7年(1932)の町会長会議で、前年に市役所が新庁舎(現在のNHK室蘭放送局)に移転したため、「市役所通り」と改められたこともありましたが今なお「仏坂」の名で呼ばれています。

森に響いたラッパの轟き

ラッパ森 (母恋駅から御崎町へ向かう坂を上る小高い丘)

明治5年の札幌本道開削工事で働く人々には粗暴な人が多く、その中でも腕力の強いものが勢力を持ち、普通のやり方では統率できませんでした。従って、組頭は、作業中の帯刀を許され、その中にはいつも抜き身の日本刀をぶら下げながら巡回していた人もいました。

さて、このラッパ森の地名の由来には、いくつかの説があります。一つは「この辺りはうっ

そうとした森で、官吏が作業員の合図にラッパを吹いて全体の指揮をとっていた」という説と「工事監督をしていた長州藩士の森さんという人が、柳の木の皮で作ったラッパで作業員の指揮をしていた」また「この辺りには熊が出ていたので、ここを通るときにラッパを吹いたから」という説もあります。いずれかは定かではありませんが、このラッパの音が新室蘭時代の幕開けを高らかに告げたことは確かです。

名前の由来は英雄の死から

牛太郎坂(ぎゅうたろうざか) (中島本町、中島スポーツセンター裏手、標識有り)

中島スポーツセンターの裏手にあり、国道37号線に通じている坂です。

明治の開拓期に川村丑太郎という人が、登別で宿屋を営みながら多くの馬を飼っていました。明治10年(1877)7月2日、所用で崎守町に出掛けた帰り道、夜道の悪路に足を取られたのか、知利別川の下流で水死しているのを発見され、この坂道で検死を受けました。そして、いつしかこの辺り一帯の地名になり、大正9年(1920)当時の輪西村の古地図には、旧日新小学校から山の手側に数百メートル入った一帯の畑や原野を「字牛太郎」と表記されています。また、沢町の満岡寺には、丑太郎の過去帳が今でも残っています。

かつて丑太郎は、ヒグマと死闘を演じた際、片目をむしり取られながらも、九死に一生を得た剛の者でした。熊を相手に闘った当時の英雄のあつけない死を聞いた住民は、その変死に驚きとショックを受け、その名を取ってこの地を牛太郎坂(丑牛)と名付け、現在は市道の名前「牛太郎坂通線」にもなっています。坂は一般的に「ぎゅうたろう坂」と呼ばれていますが、地元中島本町では「うしたろう坂」と呼ぶ人も多いそうです。

－ 他にもある 名前の付いた坂 －

・東小路の坂 または 丸井さんの坂 (丸井坂) (中央町、看板あり)

明治14年(1881)まで、西小路町との対で東小路町があり、その町の坂だったことから「東小路の坂」と呼ばれていました。また、大町(現 中央町)の旧丸井今井デパート(現 室蘭プリンスホテル)前にあるこの坂から旧室蘭駅までは、かつては多くの買い物客で賑わったため通称「丸井さんの坂」とも呼ばれました。現在はありませんが、室蘭プリンスホテルから向かって左角には、大正15年(1926)に改装・新築を重ねた三件目の店舗は正面を東京の虎屋に似せた菓子店「東陽軒」が平成13年秋まで営業していました。そのはず向いの坂下の角には、道内で三番目、室蘭で最初に開館した、芥川賞作家 三浦清宏の生家でもある小林写真館がありました。

現在は、「ノックスビル通り」と名付けられています。(ノックスビル通り...96ページ参照)

・栗林の坂 (本宅の坂) (常盤町)

測量山に向かって小公園から文化センターの右側の坂です。かつて旧家が立ち並び、坂を上った突き当たり正面には、(株)栗林商会を創業した栗林五朔が宮大工を呼び寄せ建てた蕙山苑があります(「栗林本宅」とも呼ばれていました)。(蕙山苑...82ページ参照)

現在の文化センターの場所には、かつて常盤小学校が建っていたため、「常盤の坂」とも呼ばれていました。

・ウスイの坂 (水汲道) (海岸町)

測量山からの伏流水による良質の湧き水をくむために、人々が利用した小さな坂です。「ウスイ」とは、この坂の横にあったウス呉服店(のちにウス呉ストアール)のことです。

・病院坂 (常盤町と中央町の境にある測量山に至る坂)

中央町の富留屋菓子店前の坂を挟んで真向かいに、昭和26年(1951)から平成9年(1997)まで、市立室蘭総合病院(現在は山手町に移転)が建っていたため、このように呼ばれていました。(市立室蘭総合病院...70ページ参照)